平和を刻む

沖縄県立開邦高等学校一年　仲里　すみれ

あの日から　七十七年
輝く太陽のもと
月桃の薫る、誇り高きこの島で
私は今を生きている
照らされた私の時計が
絶えず動き、今を刻んでいる
針が重なり
潮の香りが体中に巡る
長針が動く
二つの針はすぐに、ゆっくりと離れていった

七十七年前のあの日
人々が刻んだのは
今私が生きる島とは違う、
あまりにも悲惨で、残酷な沖縄
三線の音色が響いた大空が
淀んで黒く染まり、
鉄の雨を容赦なく降らせた
でいごを揺らす穏やかな島風は、
四肢の焼ける匂いと
血の匂いを運んだ

たくさんの犠牲が、時を紡いだ

あの日、
狭く暗いガマの中
身を丸め
唇をかんで息を殺す少女がいた
兵士になった夫と息子を
涙を殺して見送る母がいた
誰にも見えないところで
自らの命を爆ぜた人がいた

そこには　確かに命があった
懸命に生きようとした命が
必死に守ろうとした命が
私は、あなたは、それを知っている
あの時こぼれ落ちた命が
本当はまだ生きたかったこと
あの日も人々は
変わらず平和を望んでいたこと

ここで確かに起きたあの戦争を
私達は風化させてはならない
あの日に生きたすべての命が
私達の生きる美しい沖縄を
築き、つなげたことを
いつまでも忘れてはならない

でもいつか、
またいつか、
繰り返されてしまうのだろうか
二度としないことを誓ったあの惨事が
再び現れる日が来るのだろうか

私は悲しい
この世界ではまだ
人々が殺し合っていることが
私はつらい
今日もどこかで
少年少女が銃を持っていることが
私は苦しい
それを見ていることしかできないことが
変えられないことが
私は悔しい

平和への思いが加速する
七十七年の時を越えて、今
生きることの幸せをかみしめ、
私は自らの声を上げる

この優しい青い海に誓おう
この美しいい穏やかな空に固く約束しよう
決してあの戦争を忘れないことを
命を大切にすることを
平和を守り、広げつづけていくことを

針が再び近づく
何度も何度も同じ方向に、
同じスピードで「今」が刻まれてゆく
砂利道を彩るハイビスカスが
私の生きる未来の、その先の
世界中の平和を、永遠の平和を
心待ちにしている
それは私達が刻んでいくべき、
尊ぶべき平和だ